

【基調報告②】

三沢市“平畑(1)遺跡”の特徴について

三沢市教育委員会・生涯学習課 文化振興係 専任員 長尾 正義

1 はじめに

三沢市が市の西部に位置する、いわゆる「平畑開拓」地区に計画したスポーツ施設建設に先立って試掘調査を実施した。建設計画面積は540,000㎡で、平畑(1)遺跡～平畑(5)遺跡、平畑(9)遺跡の6遺跡が対象遺跡となった。試掘調査面積は約20,000㎡以上で、平成16年度から19年度までの4ヶ年にわたった。このうち、平畑(1)遺跡の調査は平成17年度に約4,000㎡を調査した。

2 遺跡の概要

平畑(1)遺跡は、JR東北本線三沢駅から北西に約3.4km、姉沼川に面した標高約30mの台地の南辺に位置する。本遺跡は、これまで主に縄文時代後期の遺跡として知られていたが、平成17年度の調査によって奈良時代と平安時代が加わり、範囲も東側に大きく拡大した。試掘調査で検出した住居跡は奈良時代1軒、平安時代11軒（2軒は確認のみ）である。他に平安時代の竪穴状遺構、土坑などを検出した。平安時代の集落は東西南北約100m四方の範囲に収まり重複はなかった。縄文時代のものでは前期初頭の早稲田6類式土器が出土する住居跡1軒を検出している。

本遺跡周辺で平安時代の集落をいくつか確認している。西に隣接する平畑(3)遺跡とはほぼ北側の平畑(5)遺跡からは、マウンドを伴う円形周溝墓を確認しており、その周溝内には10世紀初頭の十和田a火山灰、白頭山火山灰が堆積していた。また、平畑(3)遺跡の南西側突端部と平畑(2)遺跡の北東側突き出し部は濠で切られ、濠の内側で鉄製品や鉄滓を伴う10世紀後半と考えられる住居跡を多数確認している。

3 緑釉陶器の出土状況

緑釉陶器は、平畑(1)遺跡において精査した40ヶ所余りのトレンチ（2×50m）のうち、No.38、No.41、No.42で確認した3軒の住居跡から出土した。総数23点である。各住居跡の名称は確認したトレンチNo.を付し、TR38HP、TR41HP、TR42HP3と呼称した。住居跡ごとに出土状況等を記述したい（図1、図2）。

TR38HP（図2、図3）

東西8.6m×南北8mの大きさで、確認された住居跡の中では最大である。覆土は自然堆積の状況を呈し、十和田a火山灰と白頭山火山灰が層状に堆積している。十和田a火山灰は床面から5cm程度の間隔で堆積する。かまどは北壁に2ヶ所あり、トンネル式の煙道を持つ。東側の煙道は、崩落後に半地下式の煙道として再利用されている。

緑釉陶器は、住居内の土坑（Pit15）や床面から17点が出土した。最も大きな略完形の皿（図3-12）は、Pit15の覆土最上部から出土し、ピット内へ落ち込むような状態であった。Pit15からは、他に緑釉陶器の破片2点、完形の土師器杯2点、刻書のある土師器杯1点、鉄製紡錘車1点が出土している。また、この住居では緑釉陶器の破片が床面上に散らばって出土している。出土層位・遺構別に列挙すると、3層、4層、5層から各1点、床面から7点、Pit20から1点、旧かまど脇土坑から2点となる。他に住居跡を覆う耕作土から1点出土しているが、TR38HP以外のものである可能性もある。

住居跡に伴う他の主な遺物は、土師器杯が個体数にして20点以上、墨書のある土師器杯2点、土師器甕10個体以上、土師器耳皿1点、須恵器の長頸壺が1点、土錘1点、鉄製釘や用途不明の鉄製品10数点、炭化した木製皿2点などであり、多種多様な遺物が出土している。また、南壁近くの土坑内から炭化米と雑穀類が多数検出された。

三沢市内でこれまでも同時期の住居跡の調査をしているが、少なくとも三沢市内ではこれほど多彩な遺物が出土した例はない。

これらの遺物の中で目を引くのが、土師器坏の多さと土師器甕の少なさである。図示した土師器坏はロクロ成形で、完形もしくは1/2以上残存し、ほぼ9世紀末から10世紀初頭にかけての時期が想定されるものである。土師器甕では、器高15cm程度に復元できたものが、かまどの袖脇から1個体出土している。

#### TR41HP (図2)

東西6.4m×南北6.5mの大きさである。TR38HPから南西に約28m離れている。覆土は人為堆積である。かまどは北壁、南壁、東壁に1ヶ所ずつあり、東壁のかまどは袖が残存していたことから住居が放棄されるまで使われたものであると思われる。いずれもトンネル式の煙道を持つ。遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品(鉄鈴など)、石器、礫などが多く出土した。緑釉陶器の破片は、覆土上部から4点が出土した。人為堆積により埋まり切る前に緑釉陶器片が持ち込まれ、その後十和田a火山灰が堆積した状況であった。本住居跡から出土した緑釉陶器片3点はTR38HPの略完形の皿(図3-12)に接合した。他に、出土地点は不詳ながら、この住居跡に伴うものとみられる緑釉陶器の耳皿が1点確認されている。

#### TR42HP3 (図2)

東西、南北とも約4.5mの大きさである。覆土はTR38HPから南西に約53m、TR41HPから南西に約25m離れている。覆土は人為堆積である。かまどは北壁に1ヶ所ありトンネル式の煙道を持つ。かまどを覆う十和田a火山灰が含まれる層からは、緑釉陶器の破片1点が出土した。この他に、土師器、木質部が残存する鉄製穂摘み具、炭化した櫛や雑穀が床面から出土している。

最後に、緑釉陶器が出土した住居跡の時期についてまとめておきたい。緑釉陶器が出土した3軒の住居跡の堆積土には、915年に降下したとされる十和田a火山灰がレンズ状に一つの層として堆積し、3軒とも住居跡の中央付近で床面に接する状況である。9世紀後半から10世紀初頭にかけて構築、居住、放棄されたものと考えられる。また、TR38HPの床面あるいは土坑から出土したものと同一個体もしくは同一個体と考えられる破片が他の2軒の覆土中から出土した。これらの緑釉陶器の出土状況から、3軒の前後関係は、TR38HPが他の2軒よりも後に放棄されたことが把握できた。(長尾正義)

## 4 緑釉陶器の産地と年代

緑釉陶器の産地と年代に関しては、研究者により幾分の判断のばらつきがあるかもしれないが、以下では高橋の私見(高橋1995・2003b)をもとに、検討を加えていきたい

まずは、本遺跡出土の緑釉陶器の産地からみておく。東海の猿投窯産とみる意見もあったと伝聞しているが、筆者の観察からすれば、削り出し高台の採用や、稜の弱い稜碗や稜皿の形態などから考えて、結論的に言えば、すべて平安京近郊窯(いわゆる畿内あるいは京都)産と判断できるものである。

平安京近郊産のうち、さらに洛北・洛西・篠の各産地の製品を識別することは、通例では多くの場合において肉眼観察ではかなり難しい。ただ、この時期に生産の主体になるのは洛西や篠であり、胎土や焼き上がりなどからみると、本例はほとんどが篠窯のものともみて問題がないものであろう。篠と洛西の識別は、胎土の理化学的分析によって可能な場合があることが明らかになっているため(高橋編2007)、今後、科学的に胎土分析を行えば、より確実な成果が得られるかもしれない。

次に、本遺跡出土の緑釉陶器の器種に関して改めて整理すると、少なくとも稜皿が3点、稜碗が3点、小型碗1点、耳皿1点が存在したものと復元される。もちろん、本遺跡の調査は部分的であるため、さらに多くの緑釉陶器がもたらされていた可能性は十分にある。東日本の一遺跡から出土する平安京近郊産の緑釉陶器としても、器種のバラエティーに富む事例と評価できる。

今まとめたように、本遺跡出土の緑釉陶器の産地構成としては、いずれも平安京近郊（京都）産ということになり、数や器種としても比較的豊富である。ところが、東日本の遺跡では、むしろ東海産緑釉陶器の出土が多く、さらには東海産灰釉陶器の方が緑釉陶器よりも圧倒的に多いため、それと比べると本遺跡の状況はかなり特異なものである。陸奥などでは、東日本諸国に比べると、平安京近郊産の緑釉陶器の出土がやや多いようなので、それを積極的に評価すれば、そのような傾向が本例ではさらに増幅していることになる。本事例に関する限りで言えば、東北地方あるいは東日本全般に流通していた緑釉陶器がもたらされたというよりも、平安京などとのより直接的なつながりを持つなんらかのルートを通して緑釉陶器が一括して流入したことを考慮する必要があるだろう。今後、青森県の他の例と比較していくことにより、この地域としては一般的なことなのか、本遺跡の特異な現象なのかを判明するはずである。

続いて、これらの緑釉陶器の年代観をみていく。この時期の緑釉陶器の編年としては各氏が見解を提出しているが、ここでは筆者の試案をもとに考えていくことにする（高橋 2003 a・b、高橋編 2007）。本資料の産地とみられる京都府亀岡市の篠窯跡群では、近年大阪大学が調査した大谷 3 号窯（大阪大学 2006、高橋編 2007）を加えると、基準となる窯跡出土品により大谷 3 号窯→前山 2・3 号窯→黒岩 1 号窯という変遷を追うことができる。これに当てはめつつ、以下に検討する。

まず最も残存状況の良い略完形皿についてみると、先述の繰り返しにはなるものの、年代的位置付けを考える上では、以下のような特徴が抽出できる。a. 稜皿である点、b. 法量が 13.5cm ほどである点、c. 口縁端部に輪花を施している点、d. 器壁が非常に薄い点、e. 底部外面に緑釉を施さない部分施釉である点、f. ほとんどミガキが施されず、ナデが多く残っている点、g. 削り出し輪高台ながら削りが粗い点、などが挙げられる。

平安京近郊窯の製品では、a に挙げたように緑釉陶器の稜碗や稜皿が出現するのは、おおむね大谷 3 号（洛北の妙満寺）窯段階である。それより前の時期では基本的に稜のない碗皿類であるため、本資料も大谷 3 号窯段階以降の製品と判別できる。

…時代が下がるにつれて、緑釉陶器の皿の法量の縮小化傾向が辿れるが、本品はおおむね 13～14cm であることから、前山 2・3 号窯段階に相当する。ちなみに、黒岩 1 号窯跡段階では、さらに口径が縮小し、稜の位置も体部の中位に下がっていくので、本資料はやはり前山 2・3 号窯のものと酷似する。

…大谷 3 号窯段階ではほとんど輪花がなく、おそらく稜皿と輪花皿が別の器種として分化しているのに対して、本品は体部に稜がありつつ口縁にも輪花があることから、前山 2・3 号窯段階の特徴と一致する。黒岩 1 号窯段階では輪花が衰退化傾向を辿り、前山 2・3 号窯が輪花の盛行期であることから、本資料は前山 2・3 号窯の段階とみられる。

…大谷 3 号窯では薄いところでも 4～5mm 程度の通例のものであるのに対して、前山 2・3 号窯では非常に薄くなって、2mm 以下のものなどが確認でき、黒岩 1 号窯では再び厚くなる。この点でも、本資料は前山 2・3 号窯段階の製品にふさわしい。

…大谷 3 号窯段階では基本的に底部外面にも施釉するのに対して、前山 2・3 号窯では底部外面の施釉が省略されていく。高台の削り出しや器表面のミガキも、大谷 3 号窯では比較的入念だが、時代が新しくなるにつれて粗くなる傾向があり、前山 2・3 号窯段階とみて矛盾はない。平畑(1)遺跡の緑釉陶器の略完形皿は、上記のような点からすると、典型的な前山 2・3 号窯段階に比定することができる。……

本遺跡出土の緑釉陶器は、前山 2・3 号窯が中心で、一部はその直前段階頃のものを含むものと判断される。前山 2・3 号窯の暦年代観は、論者によって差違がある。従来には、10 世紀第 2 四半期を中心に考えられてきたが、

近年は9世紀後半に上げる見解も提出されている。これまでの資料のうち、確実な実年代の定点になると考えられるのが、平安宮西限隍23の出土例である。西限隍23の出土資料は、文献史料との対応から、延喜10年(910)から天慶2年(939)頃までに投棄されたものと推測されている。ただ、この資料では前山2・3号窯が10世紀第1四半期にまで遡るかは、厳密には判別できない。

…本遺跡出土緑釉陶器は、火山灰からみて明らかに十和田a火山灰の降下以前ということになる。もちろん供給と廃棄の時間幅を考えるべきだが、少なくとも十和田a火山灰降下の915年以前に、前山2・3号窯段階の緑釉陶器生産が開始されていたことが裏付けられることになる。平安京などでもなかなか良好な資料がない中で、本遺跡出土品は前山2・3号窯段階の緑釉陶器の存続時期の一端を示す、非常に貴重な資料群として評価できることになる。従来の検討を含めれば、篠の前山2・3段階はほぼ10世紀前半で、10世紀初め頃に遡ることが確実になったものと判断できる。(高橋照彦)

## 5 緑釉陶器出土の背景

平安時代の緑釉陶器は、これまで平安京をはじめとして全国各地で出土している。ただ、これまで確認されていた平安期緑釉陶器は、いずれもほぼ日本の古代律令国家における国郡の設置範囲内で出土していた。ところが、近年になり、青森県の平安時代併行の遺跡から、施釉陶器の出土が確認されるようになってきた。これまでの分布範囲に関する暗黙の想定を覆すものであろう。……

これまでの東北地方における調査においては、多賀城、胆沢城を初めとする官衙関連の遺跡ならびにその周辺遺跡や寺院跡などから出土するのが通常であった。また、緑釉陶器は庶民が使用する一般的な土師器とは異なり、釉薬が施されるいわゆる高級食器の部類に入るものでもある。そのため、地方においては都から派遣された官人、あるいはいわゆる在りでも富裕層などが所持し、使用するものであると一般に考えられる。……

本遺跡においては、緑釉陶器とともに須恵器壺が出土しているが、胴部下半の回転ヘラ削りからみて、既に操業を開始していたかとみられる津軽の五所川原窯の須恵器ではない。しかも太平洋岸などの製品でもない指摘する研究者もいる。詳細は今後報告の予定ながら、三辻利一氏による胎土分析ではこの須恵器壺が「山海窯群？」とされており、本遺跡の他の住居から出土した須恵器2点については、三辻氏によれば「山海窯群の製品と推定できる」と指摘されている。出羽経由の須恵器が存在した可能性も考えておかねばならない。また一方で、平畑(5)遺跡からは、出羽系の土師器甕の破片が表面採集されている。これらの点からすると、陸奥側だけでなく出羽側からの物資の流入も考えられるであろう。いずれにしても、青森県より南の地域との文物のやり取りの中で、緑釉陶器が流入する必然性は十分に認めることができる。

八戸地域で見ると、9世紀後半から10世紀前半に、集落の堅穴住居数が著しく増加する点が指摘されており(宇部2007)、その北に隣接する本遺跡も、この地域全体の隆盛の中で、平安京周辺の文物を入手できるような力を蓄える人物が出てきたことを示すであろう。その点では、前述した平畑(3)遺跡、平畑(5)遺跡から発見されている円形周溝墓との関連なども、おそらく視野に入れて考えなくてはならない問題である。このうちの平畑(3)遺跡の円形周溝墓はマウンドが残っており、十和田a火山灰が降下後、白頭山火山灰の降下前に構築されたものである。マウンドになる範囲に十和田a火山灰を敷き詰めた状態で検出された点が特徴的であり、十和田a火山灰降下の直後に築造されたのであろう。平畑(5)遺跡の円形周溝墓にもマウンドが残っており、周溝には十和田aと白頭山の両火山灰が自然堆積しており、平畑(3)遺跡よりも古い円形周溝墓であることがわかる。平畑(5)遺跡は緑釉陶器が出土した平畑(1)遺跡と直線距離で1kmほど離れているが、時期的にも近く、十分に関連があるものと推測される。

本遺跡の緑釉陶器が出土した堅穴住居は、突出した規模や構造をもつものではないが、その出土遺物としてはか

なり豊富なものである。9世紀後半にはエミシに「富饒酋豪」（『日本三代実録』貞観十五年（873）十二月二十三日条）が存在したことが文献史料からも知られるが、少なくとも円形周溝墓を築くような有力層が入手の担い手であったことは指摘できる。

その入手の契機は、もちろん様々な想定が可能であり、現状で推測するのは難しい。

…陸奥の国府や鎮守府には、東海産緑釉陶器が目立ち、平安京では圧倒的に平安京近郊窯産の緑釉陶器が多いということからすれば、国府や鎮守府を介した饗給という形よりも、より平安京と結び付きのある人物からの入手を考えた方がよいのかもしれない。それは、饗給が10世紀初頭ないし前半にはその役割を終えるという指摘（鈴木1998）とも対応する事態とも言えるであろうか。

…王臣家などと私交易を行う者や、あるいは入京した者もいたのかもしれないが、さらにそのようなエミシとの再交換なども含め、平安京周辺産の緑釉陶器を入手する過程が生まれたものと推測される。

北奥は様々な史料にもみえるように良馬の供給地として知られており、その他にも多くの特産物があることから、おそらくそれらが交易の対象になっていたはずである。

本遺跡の所在する地域は、10世紀代における擦文土器の南限であり（宇部2007）、平畑(5)遺跡でも擦文土器が出土していることから、北海道からの文物を入手し、それを南へと橋渡しする境界域としての役割を担う人物もいたであろう。北奥の特産物や北海道からの交易品を陸奥国あるいは出羽国などへともたらし、円形周溝墓を築いたようなエミシの有力層が、緑釉陶器を入手する機会を得たものと判断しておきたい。

## 6 おわりに

…青森県内の遺跡では鍵となる火山灰降下層の検出により、平安時代の考古学研究に寄与する部分も少なくない。  
…平安京ですら実年代の特定が困難な状況にある緑釉陶器に関して、産地から遠く離れた北の地の一つの住居跡において年代の一端を押さえることができるのは、その点の好例と言える。今後、平安時代研究において青森県地域の動向には目が離せないと言って間違いなく、そのための青森からの情報発信が一層望まれるであろう…。

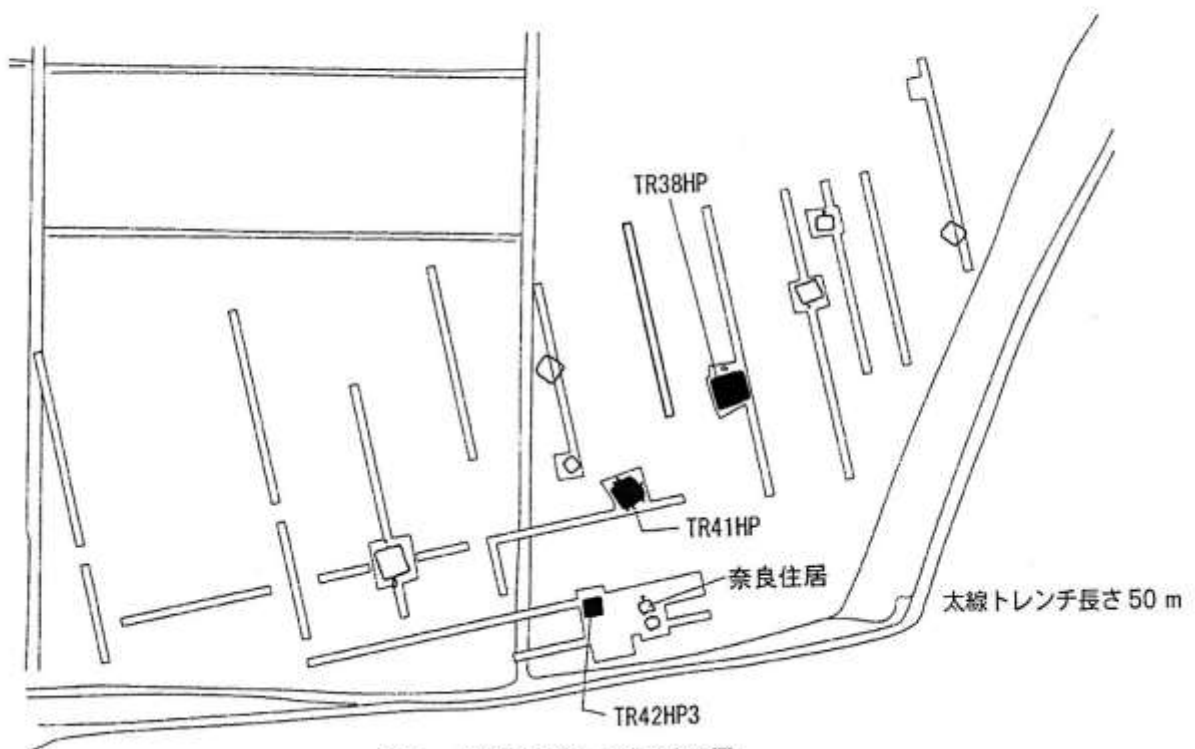
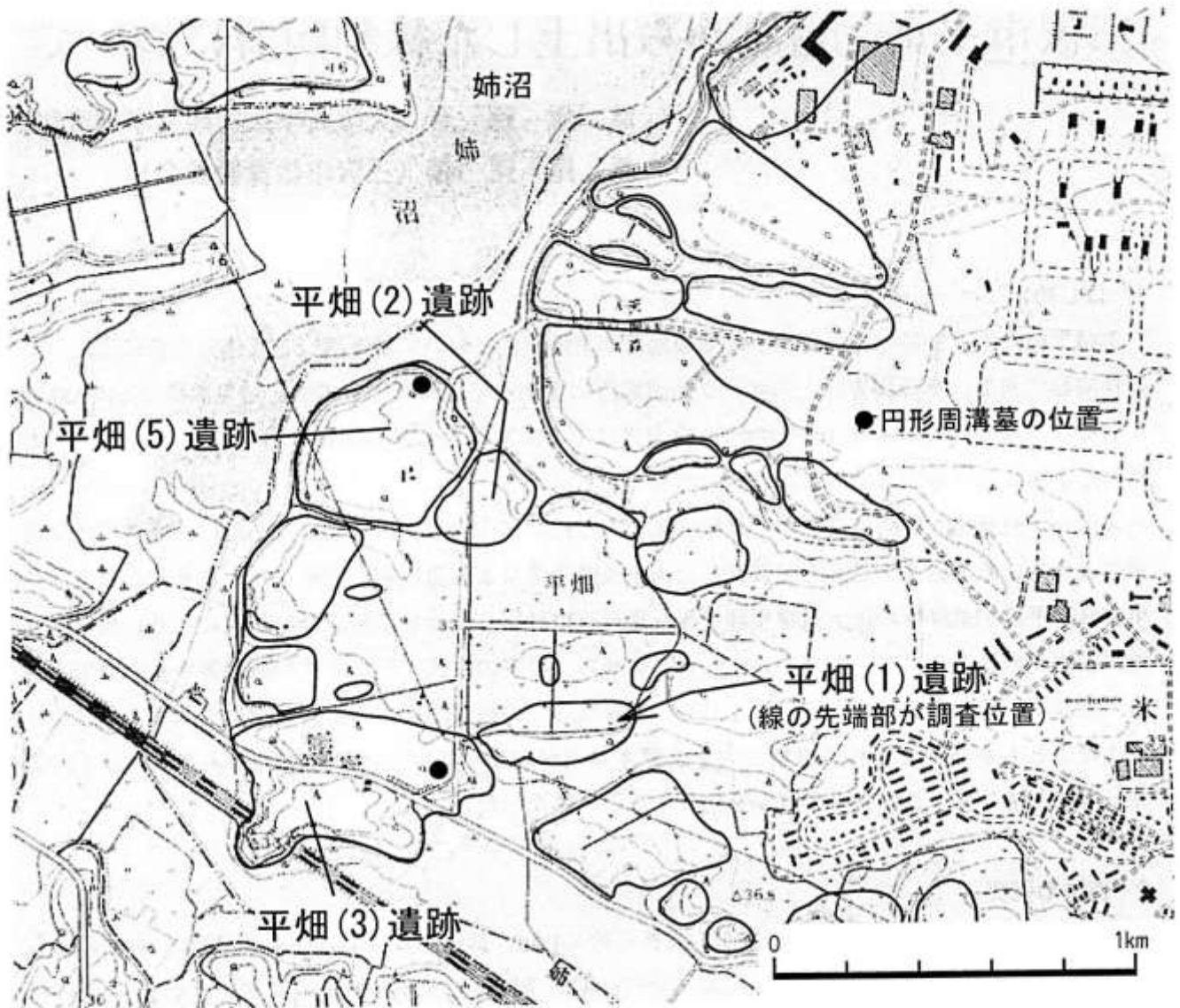


図1 遺跡の位置・住居跡配置

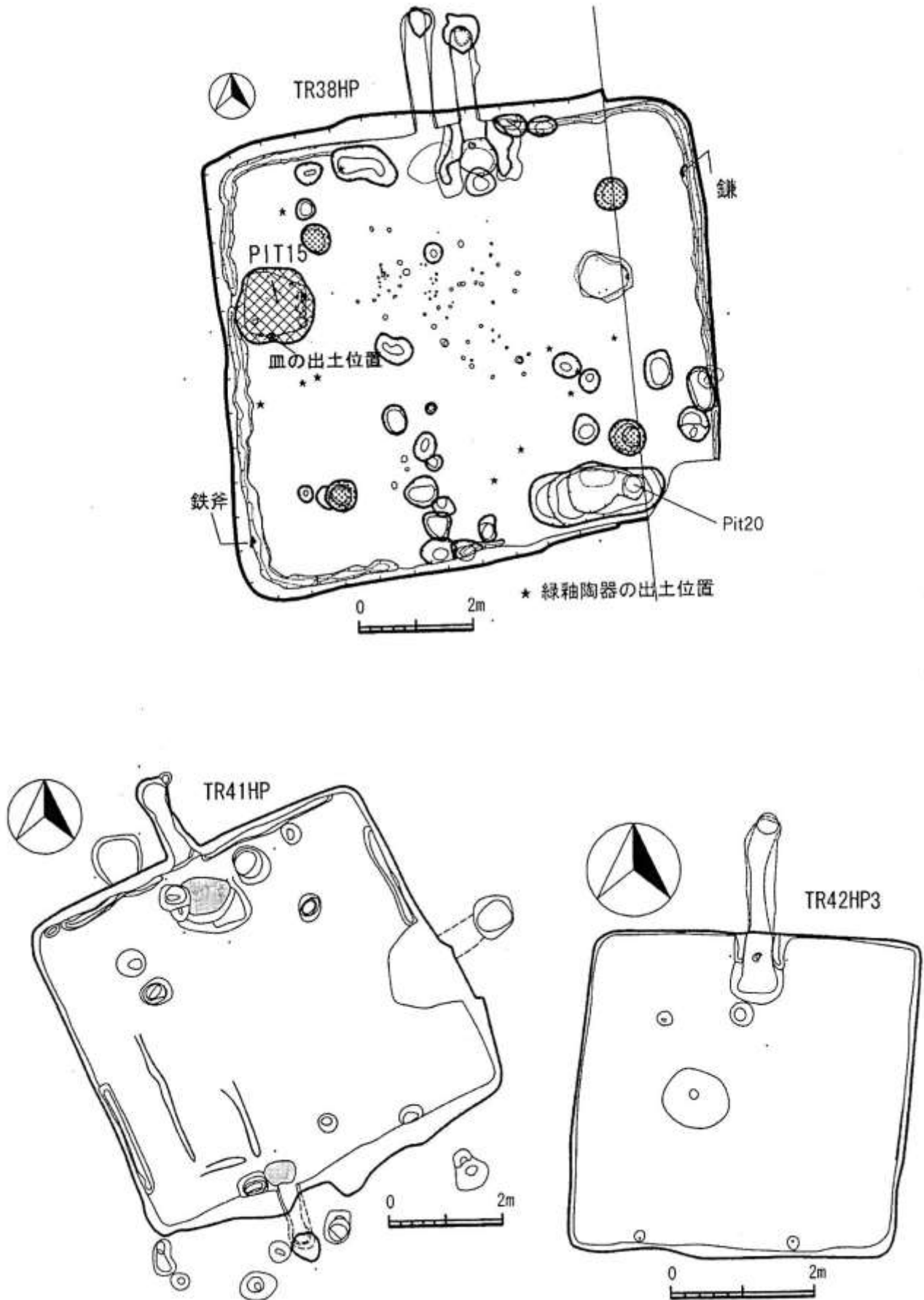


図2 緑釉陶器が出土した住居跡

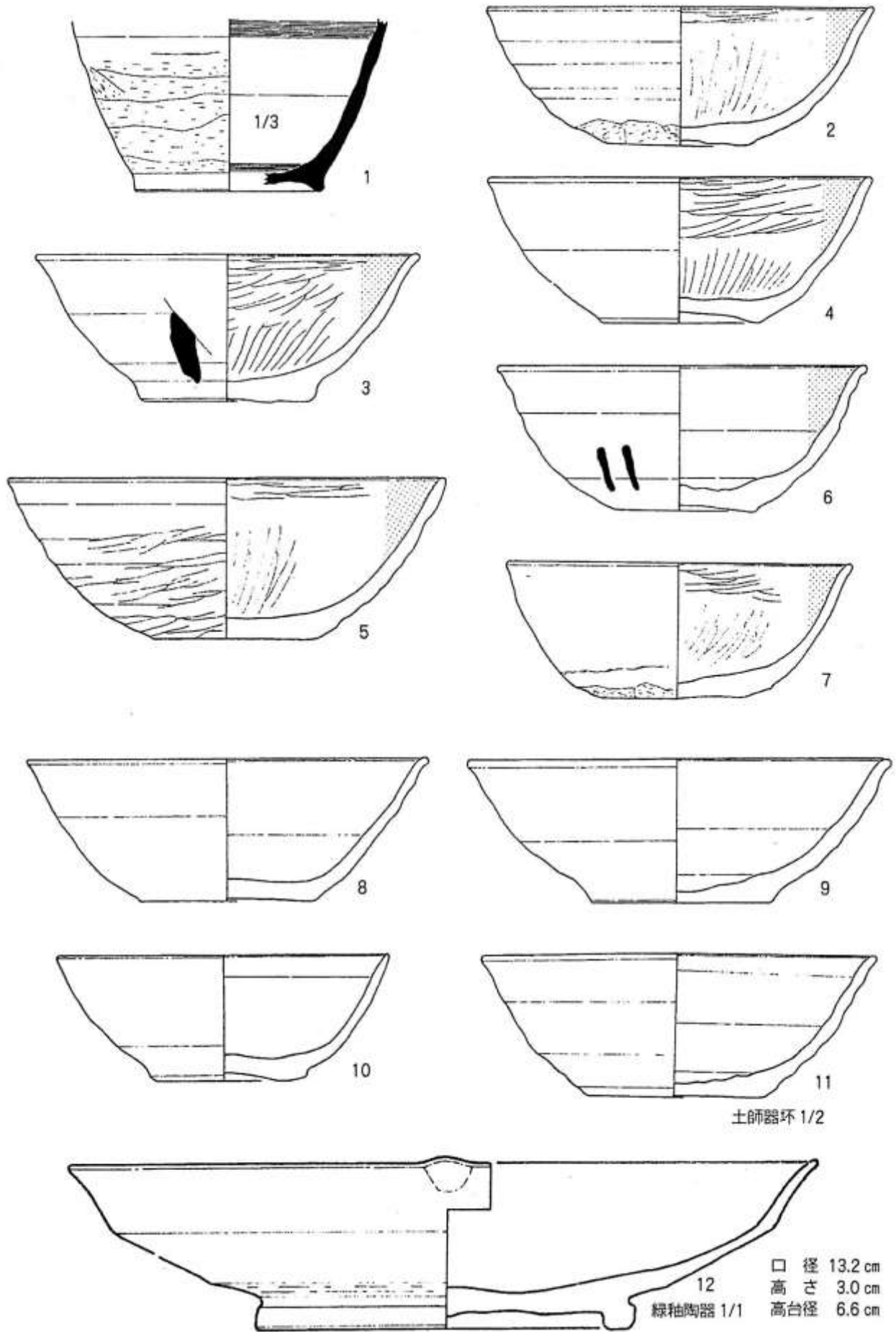


図3 TR38HP から出土した遺物



〈メ モ〉